奇跡の教室

dogezasou

僕の学校生活は淡々としたものである。誰と戯れるわけでも、何を学ぶわけでもない。ただただ目の前の現実をやり過ごしているだけだ。

　そんなある日、僕は天国に巻き込まれた。

　その日の僕は、決して何かいつもと違うことをしたわけではない。いつもと同じ道を通って学校に行き、いつもと同じ席に座り、いつも通りに先生の話を聞き流していた。先生がプリントを配る、僕は前から来たプリントを受け取り、後ろの席へと回す。

　その時、奇跡は起こった。

　僕の手の甲に後ろの女子の手が触れたのだ。その感覚は艶めかしく、しかし清らかでもあった。そしてそれは、僕にとって経験のないものだったのだ。

　僕は手に残る感覚を記憶と照らし合わせてみた。しかしそれは小４のころ偶然触れた女子の手の幼さとも、中３のころ偶然を装って触れた女子の手の冷たさとも違った。（中３のころの僕は、性欲がみなぎっていた。）

　まるで彼女の手が触れた部分から、彼女の鼓動までも伝わってくるような、そんな感じだ。柔らかい。これが女子高生の手の平というものか。

　気がつくと、僕の股間は躍動していた。とても気持ちがいい。きっと今なら空も飛べるだろう。

　遠くで先生が何か教えているのが見える。アイツはなぜ授業を進めるんだ。そんなものが今の僕の頭に入るはずがないだろう。どうやらあいつはバカのようだ。

　僕は手に残る感覚を何度も何度も味わった。その感覚が永遠であると信じて疑わなかった。しかしどうも腑に落ちない。いくら女子高生とはいえ、手の平ひとつでこんなに僕を狂わせることができるだろうか。今まで僕が触れてきた女性の手とは、明らかに違いすぎる。

　そこで僕は一つの可能性に気付いた。僕が触ったのは彼女の手のひらなんかじゃなかったのではないか。僕が触ったのは彼女の「おっぱい」だったのではないだろうか。

そう考えるとあの柔らかさも、鼓動が伝わるような感覚も説明がつく。（「おっぱい」は手より心臓に近い）

　この考えはおそらく真実だろう。しかしだとしたら大事件である。これは僕にとって初めての「おっぱい」となるのだ。齢１７にしての「初おっぱい」、それも女子高生の「おっぱい」で

ある。興奮した僕は急いで感覚を思い出す作業に戻った。これが僕にとっての「初おっぱい」だ。ならばこの感覚を何度も味わいたいと思うのは自明の理だろう。しかし、それが「おっぱい」であると意識したとたんに、僕の手の甲にあった永遠は消え去ろうとしていた。ああ、幸せとはこういうものであろうか。

　失われていく「おっぱい」の感触、追いかける僕、しかし「おっぱい」はつかまらない。

なぜ？どうして？どうすればいいの？どうなればいいの？「おっぱい」はどこにあるの？ぼくは置き去り？そんなのは…

「いやだ！！」

僕は立ち上がり、後ろをふりむいた。そして僕は探していたものを見つけると、ゆっくりとその「おっぱい」を揉んだ。

　揉んだ。何度も揉んだ。弾力によって僕の手は何度も押し戻され、それに呼応するように僕の手も「おっぱい」を何度も押し返した。「おっぱい」が僕の手のなかで踊っているようだった。

　僕は自分が本能そのものになっていくのを、おちんちんが大きくなっていくのをはっきりと感じていた。きっと今なら空も飛べるだろう。

　「おっぱい」の主は決して美しいとはいえない顔をゆがめ、あえいでいた。遠くではまだ先生が授業を続けている。

　「おっぱい」の主はその手でもって、僕の手をどけようとした。しかし欲望によって固く結ばれた僕の手のひらと「おっぱい」が離れるはずはない。彼女の手が僕の手の甲に触れる。

　その手の感触は、どこかで感じたことがあるものだった。いや、どこかというより、ここで、ほんのついさっき感じたものだ。僕は自分が間違っていたことに気付いた。

　僕の手の甲が触れたのは、やはり彼女の手のひらだったのだ。僕は触ってもいない「おっぱい」に惑わされていたのだ。

　まさに「おっぱいイリュージョン」だ。

　そのことに気が付いた僕は急に恥ずかしくなって頬を赤らめ、「おっぱい」を揉むペースを緩めた。彼女の頬も、心なしか赤くなっている気がした。

　それにしても厄介なことになった。このままでは僕は理由もなく他人の「おっぱい」を揉む変質者ということになってしまう。僕は変質者にはなりたくない。授業を続ける先生の声が忌々しく聞こえる。

　僕は焦る気持ちを抑えようと、一度「おっぱい」から手を離し、教室を見渡してみた。するとそこには神々しい景色がひろがっていた。

「おっぱい天国だ・・・。」

ぼくはそう言わずにはいられなかった。そこにあるのはいつもと変わらない授業風景である。しかし、僕のそこにはたくさんの「おっぱい」があるのだ。

　ノートをとる女子、質問をする女子、うたたねをしている女子、その一人一人に、必ずといっていいほど「おっぱい」があるのである。

　「揉みたい。」

そう思った僕は、角から順に一人一人の「おっぱい」を揉んでいった。（男子には「おっぱい」がないので、おちんちんをおしりの穴にいれておいた。）

１つ「おっぱい」を揉むたび、波動のようなものが僕をおそう。全身の細胞が爆発しそうだ。「おっぱい」が揺れると同時に、この世界そのものが激しく揺れる。「おっぱいビッグバン」が起こる。「おっぱいトルネード」が吹き荒れる。それでも先生は授業を続けている。

　おっぱいの行方は誰も知らない